“ 見える化 ” ― 宗教改革を覚えて

アンドレアス・ルスターホルツ

1517年の秋に始まった宗教改革という大事件は、地元ドイツの社会だけでなく、世界に大きな影響を及ぼすことになりました。ルターがヴィッテンベルク教会の門に“ 95箇条の提題 ”を掲げたことが、その出発点とされています。まるで今でも、釘をその門に打ち込むルターの金槌の音が聞こえるかのように、人びとはそれを語り続けています。ところが、1961年にある学者が、次のような論を発表しました。『マルティン・ルターが1517年10月31日、その教会の門に“ 95箇条の提題 ”を掲げたのは、興味を引く伝説にすぎない。』これに対して反論が激しかったのは言うまでもありません。しかし去年、新しい資料が発見され、その学者の伝説論は覆されたと主張する人もいます。いずれにしても、ルターのその提題をきっかけに重要な出来事が起こったのは、議論の余地がありません。

自分の考えを普遍的な真理だと思い込み、それを本にまとめて送り出す人々はしばしば現れます。大抵『本当の～』という表現が、その本の題に使われていますが、多くの場合、それについての議論が許されていないのは誠に遺憾で、危険を伴うことではないでしょうか。真理についての議論以前に、そもそも問題と思われることについての議論の場がないような状況は、健全ではないからです。

もちろんルターも、自分の考えは正しいと思っていたでしょう。彼の教会のあり方に対する不安を書面で表すこの提題の序文は、次の言葉で始まります。『真理への愛と、それを明らかにしようとする願いから（中略）マルティン・ルターを議長として、以下にしるされたことについての討論がなされるべきである』と。当時の教会のあり方を見て、それについて討論する必要があると感じて、ルターはその提題を発表しました。そしてその問題提起への反響は跡を絶ちませんでした。

今日、よく目にする言葉を使えば、ルターは当時の問題の“ 見える化 ”に力を注いだと言えるでしょう。問題または現状が明らかにされれば、解決までの道は心配するほど遠くはないという意味で、この言葉は使われているのでしょう。真剣に問題に取り込むのは、非常に大切であるということは、ルターのみならず、様々な改革者の行動が示しているとおりです。

（宣教師）

◇ランバス早天祈祷会　毎金曜日　午前８：20～８：40　於：ランバス記念礼拝堂（上ケ原）

11月７日（金）社会学部のために　　奥　野　卓　司

◇総合政策学部早天祈祷会　毎木曜日　午前８：40～　　於：宗 教 主 事 室